

ルサー相泊地区での今後の捕獲の進め方（案）

【1】現状と課題

○囲いわな

- ・ルサ川左岸の囲いわなでは今年度比較的順調にエゾシカが捕獲されており、当該地域においてエゾシカに対する捕獲圧を継続的にかけていく手法としては有効であろう。
- ・捕獲地点が 1 箇所だけでは、捕獲可能数は限定的であることが想定されるため、複数の囲いわなを運用することが望まれる。ただし、当該地区は急峻な地形であり、昆布浜の道路山側にある平坦地（図 2-3-1）の 1 箇所程度しか適地が見あたらない。

○餌場を固定したシャープシューティング（SS）

- ・現在試行を行っているルサ川右岸の 1 箇所のみでの SS は、捕獲効率に課題がある。現状では 2～3 名が半日程度待機しても、捕獲機会が 1～2 回程度（時期によっては 0 回の日も）、捕獲数は平均 1.3 頭/日程度である。
- ・他にも数箇所の SS 実施地点を設定し、複数箇所でのローテーションが可能であれば、捕獲効率は改善される可能性が高い。しかし、当該地区においては、地形的な制約と希少猛禽類の生息に配慮する観点から、餌場を固定した SS の実施地点を増やすことは困難。

○公道からのシャープシューティング（SS）

- ・現在、道路沿いに複数の餌付け地点を設けて、少数に分散した群れを捕獲可能な地点へ誘引可能かどうかを試行している段階である。
- ・公道からの SS は、道路の通行止めが必要であるが、現状ではエゾシカの捕獲を目的とした通行止めは困難。
- ・近年、当該地区では、冬期の工事箇所（雪崩予防柵・擁壁等）が多く（2011 年 2～3 月は 6 箇所が工事中）、工事関係車両の通行も頻繁なため、通行止めの実現は難しいと考えられる。

【2】ルサー相泊地区のエゾシカの生息状況と目標設定について

- ・2009 年 3 月以降 2 年間にわたって実施した季節移動調査の結果より、当該地区のエゾシカは定着型が多い（81 %、 $n = 21$ ）と推測される。
- ・当地区における過去 3 年間のライトセンサス確認数の最大値は 278 頭（27.3 頭/km）、日中センサスの最大値は 369 頭（46.1 頭/km）。
- ・季節移動調査用に電波発信機を装着した個体の、上記センサス時の目視割合から、当該

地区のエゾシカ生息数（メス成獣）は400～600頭程度と推定される。

- ・エゾシカ生息密度を評価する指標としては、ライトセンサスまたは日中センサスのデータを用いるのが現実的。
- ・密度操作実験における目標は、ライトセンサスまたは日中センサスの単位距離あたりの発見数を指標とし、3年間程度で半減させることとする。そのためには、1年間に150～230頭程度のメス成獣の捕獲が必要であると考えられる。
- ・順調に密度操作実験の目標を達成できた場合には、植生回復に関する目標を設定し、事業として継続的に捕獲圧をかけることを検討する。
- ・密度操作実験の期間中の採食圧低下の検証のためには、より短期間で敏感な反応が期待されるイネ科牧草、ササ類を対象としてモニタリングを行うとともに、針広混交林や本来の海岸植生でもモニタリングを実施することが望ましいと考えられる。
- ・植生回復に関する目標については、密度操作実験の実施期間中における植生調査の結果を見つつ、検討するものとする。なお、現段階では、以下のような目標設定が考えられる。
 - 1) 森林内における広葉樹の天然更新が可能な状態
 - 2) 道路法面の無立木地における広葉樹の天然更新が可能な状態
 - 3) 森林内における下枝のディアラインが消失する状態

1) については、当該地区の林床植生はクマイザサが密生している地点が多く、エゾシカの影響以外にもササの被圧によって実生の生育が妨げられている場合もあるため、慎重な調査地点の選定が必要である。

2) については、法面の浸食防止のためにも森林植生を回復させる必要があるが、法面にはシカが特に集中するために、より高い採食圧が加えられていると推察され、個体数調整の効果が現れにくいことが考えられる。また、法面に牧草の吹きつけが行われている場合には、牧草の被圧により実生の生育が阻害される可能性も検討する必要がある。

なお、環境やエゾシカの密度が異なるため単純な比較はできないが、岩尾別地区においては、広葉樹実生の生育が可能なライトセンサスにおける密度指標は、1.6頭/km以下であった。

【3】 今後の進め方

○密度操作実験の実施について

3年間程度の密度操作実験では、エゾシカの密度指標を半減させることを目標とする。実験の結果を踏まえ、植生回復に関する目標の達成を可能とする生息密度まで低下させる

ことが可能かどうかを検討した上で、本格的な個体数調整の可否を判断するものとする。

密度操作実験の手法としては、捕獲効率が悪いこと、及び、複数の捕獲地点を設けることが困難であることを考慮すると餌場を固定した SS は当該地区では不適當と考えられる。望ましい捕獲手法の組み合わせは以下の2つが考えられる。

1) 囲いわな+公道からのシャープシューティング

ルサ川左岸の囲いわなに加えて、さらにもう1箇所に囲いわなを設置して捕獲を継続する。加えて、ルサー相泊間の道路上からシャープシューティングを行い、スマートディアを極力発生させないように捕獲を実施する。

2) 囲いわな+巻き狩り

ルサ川左岸の囲いわなに加えて、さらにもう1箇所に囲いわなを設置して捕獲を継続する。ルサー相泊間の山林において、巻き狩りによる捕獲を実施する。

1) については、道路上からの捕獲の実施が必要であるため、それが困難な場合は、2) の組み合わせにより実験を実施することとなる。ただし、巻き狩りはスマートディアの発生が想定され、捕獲を継続することによりエゾシカの警戒心が高まることから、密度操作実験の目標（密度指標を半減）を達成できた場合でも、植生回復に関する目標（例えば、岩尾別地区のデータを参照すれば1.6頭/km以下）に到達するのは困難である可能性が高い。その際、密度操作実験後も継続的に一定の捕獲圧を加え続けるかどうかは、実験結果を評価する中で改めて検討する必要がある。

○想定される捕獲手法について

1) 囲いわな

- ルサ川左岸の囲いわなでは、仮に密度操作実験を実施する場合、H23年度も同地での捕獲を継続する。
- ただし、当該地区のエゾシカは4月中旬以降、草本の新芽を採食し、乾草に誘引されなくなる。誘引力が乾草より強いと推測される餌（ビートパルプやニンジンなど）は、ヒグマを囲いわなに誘引する危険性を高めるため、ルサ川左岸の囲いわなは4月下旬に一旦閉鎖する。施設はそのまま残し、必要に応じて構造の改良などを検討したうえ、2011年11月に捕獲を再開する。
- 昆布浜の道路山側にある平坦地（図2-3-1）にも、小規模な囲いわなを設置する。
- 昆布浜の囲いわなもルサ川左岸と同様に、遠隔での扉閉鎖と夜間監視を可能なものとする。

2) 公道からのシャープシューティング

- ・公道からの捕獲実施の可能性について、引き続き検討する。
- ・現在実施している道路沿いにおける餌付け試験において、多数の小規模な餌場を配置して、少数の群れに分散させることが可能かどうか、引き続き検討する。

3) 巻き狩り

- ・当該地区と隣接する岬町地区以南の羅臼町町有林では、2009 年以降、羅臼町役場と地元 猟友会（北海道猟友会中標津支部羅臼部会）が連携して、積雪期巻き狩りによる大量捕獲の実績を挙げている。

（例：2009 年 3 月の毎週日曜日、計 5 日間で 137 頭を捕獲。2010 年は 127 頭捕獲）

- ・小規模な沢が多いルサー相泊地区の地形は、知床岬先端部よりは岬町地区以南の町有林の地形と類似しており、巻き狩りによる大量捕獲が期待できる。
- ・巻き狩りの反復でスマートディア化した個体は、主に夜間に囲いわなで捕獲する。
- ・巻き狩り実施時は追い出しの方向を工夫（勢子のコースや待ちの配置の工夫）し、攪乱による移動後の行動圏内に、囲いわなが入るようにする。
- ・希少猛禽類に対する配慮の観点から、具体的な実施時期や実施範囲等については慎重に検討する必要がある。
- ・猟友会羅臼部会の会員は 2011 年 3 月現在で 17 名と年々減少傾向にあり、巻き狩りで実働可能な人数は上記より更に少ないことから、標津町や斜里町在住の猟友会員の動員も検討する。

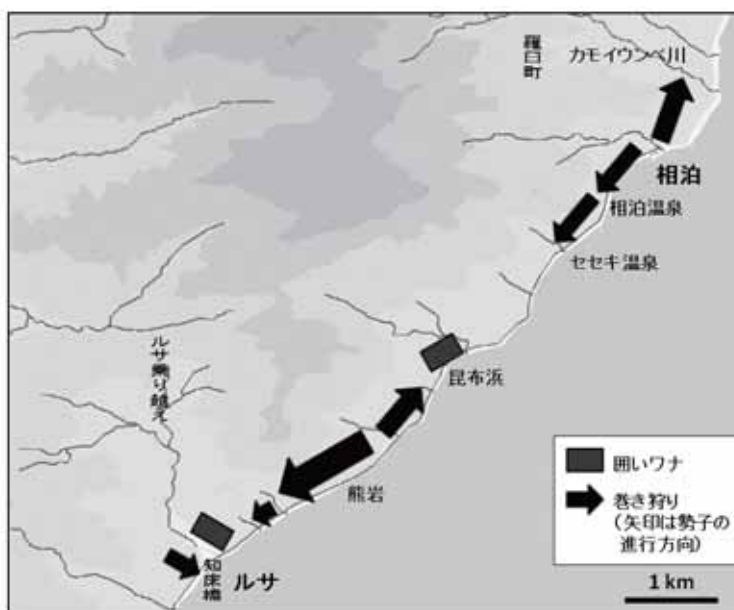


図 2-4-1.

ルサー相泊地区における囲いわなと巻狩りを組み合わせた場合の概念図。

(国土地理院電子国土 5 万図改変)

<資料2-4補足>

表 2-4-1. 標識再捕獲法に準じた手法によるルサー相泊地区のエゾシカ生息数の推定

調査年	調査日	A センサスで 発見された メス成獣(頭)	B センサス中に 視認した 標識個体数(頭)	C センサス直後に 電波を受信した 個体数(頭)	D センサス実施時期に ルサー相泊地区で受信 した頭数の最大値	A × D/B	手法
2008	4月30日	170	ND	ND	ND	ND	L
	9月18日	71	ND	ND	ND	ND	L
2009	3月26日	141	2(参考値)	ND	ND	ND	D
	4月6日	43	7	ND	22	135.1	D
	4月16日	13	2	ND	22	143.0	D
	4月25日	83	2	ND	22	913.0	D
	4月30日	168	12	ND	22	308.0	L
	5月3日	164	10	ND	22	360.8	L
	5月4日	186	11	ND	22	372.0	L
	5月9日	171	9	ND	22	418.0	L
	5月16日	119	7	ND	22	374.0	D
	6月19日	63	5	16	19	239.4	D
	10月29日	50	1	12	15	750.0	L
	10月30日	43	1	ND	15	645.0	L
	11月3日	57	3	15	15	285.0	L
	11月4日	80	5	ND	15	240.0	L
	11月6日	73	3	12	15	365.0	L
2010	1月8日	64	1	18	18	1152.0	D
	1月31日	111	1	18	18	1998.0	D
	2月11日	30	1	17	18	540.0	D
	2月27日	133	3	18	18	798.0	D
	3月9日	104	6	ND	18	312.0	D
	3月18日	221	6	19	19	699.8	D
	4月15日	89	2	18	18	801.0	D
	4月23日	187	7	16	17	454.1	L
	4月24日	171	9	16	17	323.0	L
	4月26日	151	7	17	17	366.7	L
	4月27日	133	6	17	17	376.8	L
	4月30日	181	10	12	17	307.7	L
	10月26日	55	2	ND	13	357.5	L
	10月28日	71	2	11	13	461.5	L
	10月29日	84	4	13	13	273.0	L
11月5日	115	5	13	13	299.0	L	
11月13日	74	2	12	13	481.0	L	
2011	3月9日	126	3	17	17	714.0	D

※太字は集中的にライトセンサスを実施した日。精度が比較的高いとえられる。 L: ライトセンサス
D: 日中(午後)センサス

表 2-4-2. 集中ライトセンサス実施時の推定生息数

時期	Mean	SD	N
2009年春	364.7	45.18	4
2009年秋	457.0	227.12	5
2010年春	365.7	57.3	5
2010年秋	374.4	93.81	5